

ギルバート・ホワイトのまなざし

— 『セルボーンの博物誌』における若干の用語から —

生 田 省 悟

ギルバート・ホワイト(Gilbert White, 1720-93) は自然観察記録の古典『セルボーンの博物誌』(*The Natural History of Selborne*, 1789) の著者として広く知られるところだろう。従来の評価によれば、18世紀イギリスの小村で牧師補という職務のかたわら自然観察に勤しんだホワイトは、人間と自然の麗しい調和に満ちた関係を謳った人物だということになる。また、近年ではいわゆるネイチャーライティングや自然環境をめぐる議論で彼の名をしばしば耳にしたりもする。¹ 実際、ふたりの人物にあてた書簡の体裁をとる『セルボーンの博物誌』をひもとけば、その記述は現代の読者の郷愁を誘う部分や、エコロジー思想の先駆けを思わせる要素に事欠かない。たしかに、環境危機に直面し、自然とどのように向き合っていくかが私たちひとりひとりの責務とされる今日、ホワイトの言説は示唆に富んでいると言える。ただ、その一方で留意すべきなのは、ホワイトの業績をいかに判断するにせよ、彼が生きた時代の文脈を逸脱してはならないということだ。一般に18世紀は博物誌の時代と呼ばれるが、ホワイト自身もまたこの時期における自然研究の趨勢を熟知していたし、それを意識しながら自らの課題に専念していたのである。したがって本稿は、『セルボーンの博物誌』における若干の用語、とりわけ“observation,” “oeconomy,” “conversation” を座標軸とすることにより、ホワイトを博物誌の時代に位置づけるとともに、彼の営みの意義を探ることを主眼とするものである。

『セルボーンの博物誌』に頻出する語としてまず挙げられるのは「観察、所見」を基本的な意味とする“observe”や“observation”である。周知のように、「観察」が17世紀中葉以降の自然研究を特徴づけるものであることからすれば、当然、ホワイトもその系譜に加えられるだろうことに疑いの余地はない。むしろ、彼の博物誌はひとえに観察から成り立っていた。これを前提としたとき、さらに注目すべき用語として浮上するもののひとつに“oeconomy”（かりに「エコノミー」とする）がある。ちなみに『セルボーンの博物誌』においてこの語は8回、そして類語の“economist”は1回、用いられている。

しかしながら、「エコノミー」は決してホワイト独自の用語ではなく、彼が心から敬愛してやまなかった先人ジョン・レイもすでに17世紀末にこれに言及している。² ただ、「エコノミー」が18世紀の博物誌における重要な概念となったのにはしかるべき理由がある。他ならぬ博物誌の巨人、リンネ（1707-78）が自然界を貫く「エコノミー」について、はじめて詳細に論じたからだ。リンネの活動が〈性の体系〉の提唱、自然界の体系的分類、二名法など、多岐にわたっていたのは改めて指摘するまでもないし、彼なくしては博物誌が学問として認知されることはなかったと言っても誇張ではない。彼の数多くの著作は同じ時代を生きたホワイトの活動はもとより、18世紀の自然研究に多大な影響を及ぼすにいったが、そのひとつ、「自然のエコノミー」（“The Oeconomy of Nature,” 1749）という論文は次のような文章で始まっている。

自然のエコノミーなる言葉によって、私たちは自然界の事物に関する創造主のきわめて賢明なる神慮を理解する。その神慮によって、自然界の事物は普遍なる目的を提示すべく、また相互に役立つべく、適切に配置されるのである。³

これは「自然のエコノミー」の端的な定義だし、ある意味からすればリンネが博物誌研究に託した想いのすべてが凝縮されているとさえ考えられる。別の機

会に論じたことがあるため、詳細については割愛するが⁴、何よりも注目すべきなのは、「創造主のきわめて賢明なる神慮を理解する」ための契機とされていることが明示するように、「自然のエコノミー」が明確な目的論に基づいている事実だろう。リンネにあっては、この概念は秩序からの逸脱を禁止する法として機能するものなのだ。しかも、リンネのもうひとつの論文「自然の統治について」(“On the Police of Nature”)では、こうした認識がさらに強調されている。その末尾における主張によれば、「自然はみごとに統制のとれた国家に類似」しており、全構成員の存在意義はその国家維持に奉仕すること、つまり「不利益を生じさせる過剰をすべて矯正し抑制する」ことに求められる。⁵そして、そのすべてを統括するものとは「エコノミー」をにおいて他にない。

リンネはキリスト教の伝統的なドグマ、つまり、神の支配による万物の秩序を絶対の真理として無条件に是認した。もし被造物が自らに定められた場から逸脱するならば、万物の調和は実現しない。そのような事態を阻止し、すべての被造物を調和のうちに存続させるためには神の深遠にして荘厳な配慮の働きが当然想定されるはずだ。リンネにとって「自然のエコノミー」とは、この目的を遂行するために自然界において作用する統御の原理の現われなのである。このとき、“oeconomy”の語源であるギリシャ語 *oikonomia* が *oikos* (家) と *nomos* (理法、掟) を語幹とすることは象徴的な意味合いを帯びてくる。リンネにおける博物誌研究のゆるぎない目標は自然界を統率する峻厳な原理を証明すること、ひいては神の摂理の正しさに対して敬虔な信仰告白をすることにあった。⁶

リンネの主著に『自然の体系』(*Systema Naturae*, 1735)がある。改訂増補が施され、版を重ねるにいたったこの著作で彼が実践した分類と体系化の企てを今、思い出すべきかもしれない。彼の試みは単に自然界の事物に関する事項の羅列には終わっていないからである。彼の場合、分類とは生物を形態上の差異を基準として区分けする作業である以上に、それらの生物が神慮に由来す

る調和にいかなる次元で寄与するのかを解明し、整合性をもつ仮説を提起することに等しかった。「体系」(systema)とは、神慮に基づく「自然のエコノミー」が織りなす、整然とした秩序を指示する概念なのである。

一方、ホワイトは博物誌研究の主流から遠く離れ、セルボーンの地でひとり、自然観察を継続することの意義を自覚していたが、それでもなお、リンネの業績に敏感であり続けた。『セルボーンの博物誌』にはリンネへの言及が頻繁に見られることから、“oecconomy”という用語もこの博物誌の巨人との関連を踏まえて検討されるべきだろう。村人たちの〈やりくり、経済〉といった意味で用いられている4箇所(180, 182, 182, 230)を除けば、リンネの場合と基本的に対応する用法とみなされるものが「ミミズ」に関する記述に現われてくる。これは後のダーウィンの研究にも影響を与えたとされる論説だが、ともかくホワイトは、頻繁に洪水に見舞われる土地がやせているのはミミズが溺死するからだと推測し、次のように述べる(196)。⁷

The most insignificant insects and reptiles are of much more consequence, and have much more influence in the oecconomy of nature, than the incurious are aware of; and are mighty in their effect, from their minuteness, which renders them less an object of attention; and from their numbers and fecundity.

自然のエコノミーにあっては、まったく取るに足らない虫や爬虫類も、不注意な人間が思う以上に重要な意義をもち、重要な影響を及ぼします。注意を引く対象にもなりえないほど小さいことから、また、数が多く多産であることから、それらのもたらす効果は大きいのです。

一読して明らかなおと、自然界を統率し、秩序と調和をもたらす原理としての「自然のエコノミー」にはいささかの隙もないというのだ。さらにもう一例としては、池に浸って安らぐ牛の排泄物に湧いた虫が魚の餌になることを述べ

た箇所を挙げることができる(27)。

During this great proportion of the day they drop much dung, in which insects nestle; and so supply food for the fish, which would be poorly subsisted but from this contingency. Thus nature, who is a great economist, converts the recreation of one animal to the support of another!

こうして一日の大半を過ごす間に、牛たちは大量の糞を排泄し、それに虫が湧きます。そうすると魚に餌が供給されることにはなりますが、この偶然がなければ、魚は餌に事欠くでしょう。かくして偉大なエコノミストたる自然は、ある動物の気晴らしを他の動物の糧に変えるのです。

「自然」を擬人化した用法の主旨は、やはり調和を前景化することにあった。ホワイトの記述は、自然界における事物が「相互に役立つべく、適切に配置される」としたリンネの言葉を反響させていると言えるかもしれない。

だが、見逃すべきでないのは、「エコノミー」がリンネにあってはドグマとして用いられているのに対して、ホワイトのそれは具体的な現象に即していること、つまり個別の事例の観察を踏まえていることだろう。すでに触れたように、ホワイトは常に実際の観察に基づくことでしか議論を展開しようとしな。彼の姿勢は、「エコノミー」を論じる際にも踏襲される。それを示唆するのが、「カエル」(“reptile”)の変態に関する記述である(50)。

How wonderful is the oeconomy of Providence with regard to the limbs of so vile a reptile! While it is aquatic it has a fish-like tail, and no legs; as soon as the legs sprout, the tail drops off as useless, and the animal betakes itself to the land.

かくも卑しいカエルの四肢に関する神の摂理のエコノミーは何と驚異に満ちているこ

とでしょう。水中にいるときは魚に似た尾をもちますが、脚はありません。脚が出るとすぐに、尾は無用のものとして脱落します。そしてこの動物は陸に上がるのです。

記載された内容は取り立てて目新しい知見ではないし、「神は細部にも宿り給う」という教義を復唱しているに過ぎないと解釈されるかもしれない。しかしながら、この場合の「エコノミー」もまた、観察という手続きを経た上で、特定の生物の生を保証する原理に基く作用と捉えられていることに留意したい。ホワイトのこうした方法論が含意するのは、彼自身にとって自然界全体の秩序を裏づける仮説を構築するのに劣らず、あるいはそれ以上に、個々の生物が現実にとどのように生かされているのかをつぶさに観察するのが重要な課題だったということではなかったか。

「エコノミー」がホワイトにあっては個を生かす作用へと傾斜していると仮定するならば、逆に、生物の実際の生態を厳密に検証することが「エコノミー」を確認する行為と同義となる。彼にとって、「エコノミー」を見出すには観察を通じる他はありえない。だとすれば「エコノミー」と生態との間には表裏の関係が成立する。ホワイトはコオロギの一種をめぐる記述において、その両者に言及したことがあった(224)。

As their cheerful summer cry cannot but draw the attention of a naturalist, I have often gone down to examine the oeconomy of these *grylli*, and study their mode of life; but they are so shy and cautious that it is no easy matter to get a sight of them;

彼らの陽気な夏の歌はナチュラルリストの注意を引かずにはおかないため、私はしばしば出かけては、これらのコオロギのエコノミーを検証し、その生活の様態を研究しようとしたものです。しかしながら彼らはたいそう臆病で用心深いものですから、その姿を見つけるのは容易なことではありません。

このように「エコノミー」と生態とを並置させ、後者に「(コオロギの)生活の様態」(“their mode of life”)と明確な呼称を与えた点にこそ、ホワイトの博物誌研究が独自の視覚を獲得する契機となる。そして、視線が生物の生それ自体に注がれていることを告知する「生活の様態」は、『セルボーンの博物誌』を際立たせる、もうひとつの用語と密接に関わらずにはいない。

*

ここで、「生活の様態」に関連する語が『セルボーンの博物誌』に頻出する事実を示すべきだろう。“mode(s) of life”は上の引用以外に4回(163, 229, 233, 241)、それとほぼ同義の“manner of life,” “motions and manner of life,” “way of life”は各1回用いられている。これだけでも、ホワイトの関心のありかが推測されるはずだが、彼の観察は決して「様態」の次元にとどまっただけではない。「様態」の詳細にまで到達する試みが反復されるからだ。彼のそうした意思を如実に物語る用語こそ“conversation”に他ならない。これは文中で6回出現するが、特徴的なのは常に“the life and conversation(s) of”という形式が採用されていることである。

実を言うと、この“the life and conversation(s) of”もホワイトの創出による表現ではなかった可能性がある。ジョン・レイがすでに“Fishes, which were to live and converse in a cold Element”(「冷たい元素のなかで生き、群れ集う魚たち」と述べているし、⁸すでに紹介したようにホワイト自身もレイの著作を精読していたからだ。しかしながら『セルボーンの博物誌』における反復は単なる影響関係の次元を超えてしまっていることを、また、ホワイトがこの表現に何らかの個人的なこだわりを抱いていたことを窺わせる。

ホワイトの用法を知るためには、まず、“their mode of life”の場合と同様、“oeconomy”と並置された例(85)を見ておく必要がある。

A knowledge of the properties, oeconomy, propagation, and in short

of the life and conversation of these animals, is a necessary step to lead us to some method of preventing their depredations.

これらの動物の属性とエコノミーと繁殖、要するに生活と習性に関する知識は、それらの略奪行為を阻止する手法を見い出すための段階として欠かせないものです。

不正確であることを承知した上で、“conversation”をかりに「習性」と訳しておくが、これは害虫駆除を話題とする箇所の一節である。特に留意すべきなのは“oeconomy”と“the life and conversation of these animals”との間に力点の差異が存在することだろう。ホワイトにあっては例外的な現象なのだが、前者の意義が相対的に後退し、他のふたつの要素と並記されているのに対し、後者はそれらを包括かつ要約するものとされているのだ。

さらに別の用例を挙げるとすれば、ホワイトは鳥をめぐる所見において2回、この語を用いている(80, 162)。そのうち、「ショウドウツバメ」に関する記述を紹介しておく(162)。

But it is much to be regretted that it is scarcely possible for any observer to be so full and exact as he could wish in reciting the circumstances attending the life and conversation of this little bird,...

この小鳥の生活と習性に付随する細目を詳しく述べようとする際、どんな観察者も十分かつ正確にと願うものの、まことに残念ながら、思いどおりにゆくことはほとんどありません。

ツバメ類はホワイトが最も愛した生物であり、『セルボーンの博物誌』にもこれらに関するおびただしい記述がちりばめられている。それだけに、十分な観察が得られないという趣旨の発言には悔しさがにじんでいるのだが、いずれにしても、この一節の主眼が“the life and conversation of this little bird”に置かれていることには変わりない。だとすれば、“life”についてはともか

く、“conversation”という用語を検証する作業は『セルボーンの博物誌』理解に欠かせない過程だと言える。

例として提示したふたつの文脈に即してOEDを参照すると、“conversation”の項には次のような語義が記載されている。

1. The action of living or having one's being in a place or among persons. Also *fig.* of one's spiritual being. *Obs.* (最終引用例 1705年)
2. The action of consorting or having dealings with others; living together; commerce, intercourse, society, intimacy. *Obs.* (最終引用例 1770年)
6. Manner of conducting oneself in the world or in society; behaviour, mode or course of life. *arch.*

それぞれの語義はいずれもラテン語 *conversatio*[*conversor* + *-tio*] の原義を反映してはいるが、もっとも妥当な解釈としては、6の場合がホワイトの用法に近いとするものだろう。ところが、すでに列挙したように、『セルボーンの博物誌』には“mode of life”に類した用語がかなりの頻度で出現する。ホワイトが意識して使い分けているとするならば、それらと“conversation”を含む表現との相違は決して微小ではないはずだ。つまり“conversation”には、“mode of life”に還元される傾向を帯びた6の語義ばかりではなく、1や2の語義をも孕む何か特別な意味が負荷されていると考えざるをえなくなる。

この問題を検討するには、いったん語義それ自体から離れ、ホワイトの博物誌研究の質に向かうことが有効かもしれない。しばしば自負しているとおり、ホワイトの観察は鋭く正確であり、いくつかの新知見をもたらしたほどだったが、⁹ 彼の記述は決して無味乾燥なものではなかった。『セルボーンの博物誌』を特徴づけるものとしてよく知られている箇所にも、やはりツバメに関する語り

がある (145-6)。

The *hirundines* are a most inoffensive, harmless, entertaining, social, and useful tribe of birds: they touch no fruit in our gardens; delight, all except one species, in attaching themselves to our houses; amuse us with their migrations, songs, and marvellous agility; and clear our outlets from the annoyance of gnats and other troublesome insects.

ツバメの類はまったく悪気がなく、罪のない、心楽ませてくれる、社交好きな、そして有益な鳥の一族です。私たちの果樹園の果実には手を出しません。ただ一種を除けば、すべてが喜んで私たちの家になつきます。渡りをしたり、歌ったり、驚異的な敏捷さを見せたりしては、私たちを歓ばせてくれます。また、私たちの庭からブユや他のやっかいな虫の煩わしさを取り除いてくれたりもします。

この一節では、厳格な観察者の視線とツバメに限りない愛着を覚える個人の視線が微妙に交錯している。その結果生じた、まぎれもない感情移入と擬人化への傾斜はどう評価されるべきなのか。時代を反映した記述様式に過ぎず、客観性から逸脱したものとして切り捨てられてしまうのか。そうではなく、ホワイトの観察と記述の様態は特有の視角を提示している。彼はツバメの生それ自体に意義を認め、その習性を知ったことを率直に喜んでいるのだ。人間と同じく、ツバメも生を謳歌する主体であることを観察を介して認知したと言ってもさしつかえない。ホワイトの関心のありかは、生物のそれぞれが特有の習性を持ちながら生を営んでゆくという事態を検証することにあった。これを踏まえるとき、“conversation” という語、そして “the life and conversation of animals” という文言は “mode of life” などだけでは十分に包括しえない概念を表象することが理解される。それは、生物のすべてが自然界に調和をもたらす「エコノミー」に生まれつつ固有の生息場所を確保し、同族や他の生物とさまざまに関わりながら、それぞれ独自の生を営む事態を複合的に意味してい

るのである。

“the life and conversation of animals”の含意するところがどれほど重要であるのかについては、ホワイト自身が告白している。彼は、王立協会に提出したツバメに関する論文に言及して、次のように述べたことがある(152)。

...and they will consider it, I hope, as it was intended, as an humble attempt to promote a more minute inquiry into natural history; into the life and conversation of animals.

そして協会員諸氏には私の論文の意図を理解し、それが博物誌、つまり動物の生活と習性のより詳細な探究を推進するためのささやかな試みとお考えいただきたいと存じます。

もはや何の説明も要しはしない。ホワイトにとって、「動物の生活と習性のより詳細な探究」を遂行すること、それが博物誌研究そのものに他ならなかった。¹⁰

博物誌に対するホワイトの視覚はリンネとの対比によって際立ってくる。すでに触れたとおり、ホワイトの生きた時代にはリンネの学説がヨーロッパ全土を席卷していた。ちなみにイギリスにリンネ協会が設立されたのは『セルボーンの博物誌』上梓の直前、1788年のことである。ホワイト自身、リンネの業績を十分に承知し、評価するのにやぶさかではなかったが、同時にそれに満たされない想いを抱いてもいた。それは、直接リンネに言及してはいないものの、彼の自然界を体系的に分類する試みについて発言した箇所からも窺われるところである(208)。

...without system the field of nature would be a pathless wilderness: but system should be subservient to, not the main object of, pursuit.
体系的分類がなければ、自然という領域は路なき荒野と化すことでしょう。けれども

体系的分類は調査研究に従属すべきでなのであって、その主要な目的であってはなりません。

さらに加えて、ホワイトは、リンネに追従する者たちが書斎で標本分類に専念するのを批判しつつ、複数形に託して自らの立場を示唆することもあった(136)。

...but the investigation of the life and animals, is a concern of much more trouble and difficulty, and is not to be attained but by the active and inquisitive, and by those that reside much in the country.
ところが、動物の生活や習性の調査ははるかにやっかいで困難な課題で、活動的な、探究心が強く、もっぱら田舎に住んでいる人でなければ成しえないのです。

間接的なリンネ批判にも、「動物の生活と習性」が出現する事実は重い。時代の主流が標本を「観察」し、生物を分類し、体系化を図ることに専念していたとすれば、ホワイトにおける「調査研究」の「主要な目的」は自然を現場で「動物の生活と習性」つづさに「観察」することのうちに潜んでいたのだった。

*

ホワイトを18世紀における博物誌の系譜に位置づけた場合、まず浮上したのは自然界に秩序と調和をもたらす原理としての「エコノミー」をいかなる次元で捉えるべきかという問題だった。自然界を貫く神の摂理を「エコノミー」という概念を介して証明することが重要な課題とされたのである。この解釈をめぐっては、リンネとホワイトでは決定的な差異が生じている。繰り返して述べるならば、リンネにあっては、論文「自然の統治について」の末尾ばかりか標題それ自体が雄弁に物語るように、「エコノミー」は秩序からの逸脱を禁止す

る法として機能するものと位置づけられる。そして、彼が生涯にわたって取り組んだ分類と体系化の試みは、究極には自然界を支配する神の厳格な秩序を証明するという目標に収斂してゆく。

ホワイトも、自然界を支配する「エコノミー」は無条件に受け入れているし、彼の博物誌研究の課題だったことは疑いえない。しかしながら彼は、リンネの厳格な教条主義を選択していない。むしろ、「忌まわしいカエルの四肢」やツバメ類に関する記述など、どれをとっても、そこには「神の摂理のエコノミーは何と驚異に満ちていることでしょうか」という思い、つまり、生物に注がれた神の深い愛に対する感謝の念がこめられている。ホワイトにとって、「エコノミー」は生を育み、保証する原理に他ならない。

ホワイト自身しばしば告白するように、自然界には研究すべき事象が無限にある以上、それらを網羅的に分類し、体系づけることなど不可能に等しい。リンネの方法に従うのであれば、自らの認識する「エコノミー」の意義を説き明かす道は閉ざされてしまう。結局のところ、18世紀の博物誌研究に対してホワイトが担った役割とは、「観察」という行為に明確な意義をもたらした点にあった。彼が「動物の生活と習性」を探究することを博物誌と直結させた事実が含意するのは、生物の多様な生態に関する精緻な知見を集積しない限り、それを支える根源たる神の摂理を正確に知ることはできないという直感だろう。生物がたがいに関係し合うと同時に、それぞれに固有の豊かな生を享受している状況こそ、自然界を貫く「エコノミー」を忠実に写し出しているとすれば、「動物の生活と習性」の詳細を確認してはじめて、「エコノミー」の意義も立証されるはずだ。ホワイトにあっては、生物の生を育み、保証する「エコノミー」にいたる最善の方法が「観察」の持続のうちに求められたのだった。

個別の事象から普遍へという方向性のことを、ホワイトは「普遍的な正しい博物誌へいたる道程」(“the way to an universal correct natural history”) (80)と呼んでもいる。時代の主流に追従するだけであるならば、ホワイトのように周縁に置かれた研究者の存在意義はほとんどないに等しい。彼の場合、最

先端の学問としての博物誌の発展に貢献できる唯一の道は、観察に裏づけられた視座から自然界の「エコノミー」の現実態を解明してゆくことしかありえない。だからこそ彼は、自らが「他人の著作からではなく、対象それ自体から観察すべき事柄を得」る「野外のナチュラルリスト」(“an out-door naturalist”)だと宣言しなければならなかった(109)。これは現代ばかりか当時の読者にも奇異な印象を与えずにはおかない同義語反復めいた呼称であり、決して洗練された語法だとは言えない。だとすればなおのこと、ホワイトは確信をもってこの言葉に自らのアイデンティティを託している。そして、批判と自負が交差した「野外のナチュラルリスト」のたゆまぬ観察こそが希有の観察記録『セルボーンの博物誌』として結実する。

冒頭でも触れたように、今日、ホワイトの営みはエコロジー思想をはじめ、さまざまな領域でさまざまな角度から取り上げられている。人間と自然との関係の再定位が緊急の課題とされていることからすれば、ホワイトが自然に向けたまなざしのうちに何らかの示唆が求められているとも考えられる。その意味で、彼の多様な営みが記された『セルボーンの博物誌』は私たちに向けて今も開かれているのだ。だが、そのテキストをどのように切り取るにしても、時代の文脈は把握されなければならない。『セルボーンの博物誌』に出現する“observation”はもとより、“oeconomy”や“conversation”といった用語からは、たとえ一端であるにせよ、18世紀の博物誌研究の性格と動向、そしてホワイトに特有の視角がかいま見えてくるのである。

註

1. こうした評価についてごく一部を挙げるとすれば, Allen, 50-51.; Worster, chap. 2; Stewart, xxi-xxii. などがある。
2. Ray, 48, 102, 350, 352. 〈自然のエコノミー〉 (“economy of nature”) の由来については, Worster, 37. を参照。ちなみに, この表現はダーウィンの著作にも頻出するほか, ワーズワスの『湖水地方案内』 (*Guide to the Lakes*, 1810) などにも見受けられる。
3. Linnaeus, “The Oeconomy of Nature,” 39.
4. 拙稿『「セルボーンの博物誌」における〈自然のエコノミー〉』『金沢法学』第41巻第2号 (1999年), 167-186 を参照されたい。
5. Linnaeus, “On the Police of Nature,” 164.
6. 版を重ねた『自然の体系』の扉には, 神の栄光を称えるべく, 『詩篇』104・24の言葉が常に掲げられていたが, レイの主著『創造の御業に現われたる神の叡知』 (*The Wisdom of God Manifested in the Works of Creation*, 1691) の意図は聖書のこの一節を証明することにあった。この事実からだけでも推測されるように, リンネはレイの業績を強く意識していた。ホワイトの背景をなす18世紀の博物誌研究は汎ヨーロッパ的な広がりを見せていたのである。
7. 『セルボーンの博物誌』からの引用は Richard Mabey, ed. *Gilbert White: The Natural History of Selborne*. による。なお () 内の数字はページ番号を示す。
8. Ray, 329.
9. Stewart, 25. を参照。
10. Johnson, 28. によれば, 『セルボーンの博物誌』1770年3月付の記載は当初, “The life, conversation, and economy of animals are the life and soul of natural history.” (「動物の生活, 習性, エコノミーは博物誌の生命かつ魂なのです。’) という言葉で結ばれていたという。

引用・参考文献

- Allen, David E. *The Naturalist in Britain: A Social History*. London: Penguin. 1976.
- Johnson, Walter. *Gilbert White: Pioneer, Poet, and Stylist*. London: John Murry. 1928.
- Linnaeus, Carolus. “The Oeconomy of Nature.” *Miscellaneous Tracts Relating to Natural History, Husbandry, and Physick*. Trans. Benjamin Stillingfleet. 1775; New York: Arno P. 1977. 39-129.
- _____. “On the Police of Nature.” *Selected Dissertations from the Amoenitates*

Academicae. Trans. F. J. Brand. 1781; New York: Arno P. 1977. 129-66.

Ray, John. *The Wisdom of God Manifested in the Works of Creation*. 1691; New York: Arno P. 1977.

Stewart, Frank. *A Natural History of Nature Writing*. Washington, D.C.: Island P. 1995.

White, Gilbert. *Gilbert White: The Natural History of Selborne*. Ed. Richard Mabey. London: Penguin. 1977.

Worstr, Donald. *Nature's Economy: A History of Ecological Ideas*. 2nd. ed. Cambridge: Cambridge UP. 1994.